

廃棄食品 命へつなく

まだ食べられるのに捨てられている食品が、日本で年間約800万トにも及ぶ。これは米の年間総収量850万トにほぼ匹敵する量だ。芦屋市の県認定特定非営利活動法人「フードバンク関西」（同市呉川町）はそんな食べ物のロスを減らすため、企業などの余剰食品を、支援を必要とする団体などに分配している。その取り組みについて取材した。

【入谷晴美】

「フードバンク関西」

フードバンク関西の倉庫兼事務所には、段ボールいっぱいのお菓子やパンが運ばれていた。ほんの小さな気泡が入っているだけで売り物に

ならないため、廃棄処分となった食品だ。賞味期限内で味も落ちておらず、安全面でも問題は無い。理事長の浅葉めぐみさんとスタッフ

からは「これは子供たちが喜んでくれそうねえ」と目を輝かせる。冷凍保存されている真空パック入り焼き鳥は、外装の紙箱がはがれかけているだけで小売り店が嫌がり、卸せなくなった商品。少し

割れたクッキーやひなあられなど季節商品の売れ残りも本来なら廃棄される。

こうした食品を無償で預かり、児童養護施設、障害者共同生活ホームなどに無償で提供するのがフードバンクの取り組みで、大手スーパーからはパンや野菜、果物などを引き取

っている。浅葉さんは「食べ物だけに企業も捨てるには抵抗があるんです。福祉予算が削られる中で各施設にはとても喜ばれていますし、届ける私たちもうれしい気持ちになるんですよ」と話す。

膨大な食品ロスの裏側で食べ物がなく命を落とす人がいる。「世界では8億人が栄養不足の状態です。『食べ物』が私たちが命の糧」という。現在41人のボランティアが交代で仕分けや配達を行っている。事業

収益ゼロの中でガソリン代、電気代などの運営費は年間約700万円。寄付金、助成金に加え、賛助会員の会費が頼りだ。企業だけでなく、家庭で余っている食品も

未開封で賞味期限内ら受け付ける。特に不足しているという。「平日の昼間動くボランティア」も集中だ。問い合わせ先 同法人（0797・83330）へ。



①食品の仕分けをする浅葉めぐみさん（左）らスタッフ②フードバンク関西に届けられた少し欠けたクッキー

